

平成21年度 京都府立大学地域貢献型特別研究 (ACTR) 成果

分類 番号	B2	取組 名称	20 世紀における京都の文化と景観に関する学際的研究—下鴨・北山地域を中心
研究代表者： 文学部 教授： 野口 祐子			
研究担当者： 京都府立大学（浅井学、赤瀬信吾、上杉和央（以上、文学部）、大場修（生命環境科学研究科）（敬称略）） 外部分担者・協力者（京都府立植物園園長 松谷茂氏、京都府立総合資料館館長 井口和起氏 資料館京都関係資料主任 松田万智子氏 西村隆氏 ほか）			
主な連携機関（所在市町村、機関（部署）名） 京都府立植物園 京都府立総合資料館			
【研究活動の要約】			
<p>本研究には2つのテーマを設定した。</p> <p>(1) 連携する3機関の地元である下鴨・北山地域の文化と景観、およびその変遷をたどる。</p> <p>(2) 府立植物園をはじめ京都の景観が詳しく描かれている川端康成作『古都』を題材に、京都イメージを分析する。</p> <p>この2つのテーマについて、府立総合資料館の資料を活用して定期的に研究会を開いた。『古都』における京都イメージの検討には、小説だけでなく、同時代の随筆・写真・イラスト・広告・観光案内パンフレット、そして『古都』を原作とする映画をはじめ、映像資料も分析対象となった。</p> <p>それと平行して、下鴨・北山地域の現地調査（上杉・大場）・京都市中心部の町家と町並みの調査（浅井・野口）・北山杉生産地の調査（井口和起京都府立総合資料館館長の協力）を行った。</p>			
【研究活動の成果】			
<p>共同研究は「北山」とはどこのことか？という疑問から出発したが、平安時代以来、京都のスプロール現象によって「北山」が指す地域も変化していくこと、現在の「北山地域」という呼称が近代以降の京都市街北部の整備事業の中で定着していく過程を明らかにした。下鴨神社周辺地域については、かつては神社関係者の住宅が整然と建ち並ぶ地域であり、社家町の景観を呈する区域もあったこと、現在もかつての町並みの面影が継承されていることを明らかにした。</p> <p>京都イメージの焦点となったのは、町家の家並みが連なる景観と、北山杉が連なる景観である。『古都』の舞台である昭和36年の京都について、観光・景観という観点から論じた。高度経済成長期に明るい未来を信じていた社会で、川端康成が古都性の衰退を描いた意義は、開発によって日本的風土を変貌させていく時代への異議申し立てであったことを明らかにした。映画化された『古都』における京都イメージでは、京都らしい景観が失われていくにつれて、ロケが困難になり、最近の映像化では観光地京都のステレオタイプイメージに頼らざるを得ない事態となっていることが明らかにされた。また『古都』に登場する様々な植物に注目して、京都らしさを探った。特に北山杉の里について詳しく書かれている箇所注目し、当時全盛であった北山杉林業について検討した。</p>			
【研究成果の還元】			
<ul style="list-style-type: none"> 平成21年11月3日、3機関連携記念公開シンポジウム「古都のイメージ大解剖!—川端康成『古都』を手がかりに」を開催した（於：京都府立大学学生会館ホール、主催：京都府立大学文学部・京都府立総合資料館・京都府立植物園・京都府立大学地域連携センター）。発表者として松谷植物園園長・井口総合資料館館長を迎え、学内からは野口・赤瀬・浅井が発表した。参加者：210名。盛況・好評であった。 平成22年3月22日、公開シンポジウム「よみがえる下鴨神社社家町」（於：下鴨神社研修道場、主催：紘の森財団・協力：下鴨神社青年会）において、研究分担者の大場教授の指導により研究成果を卒業論文にまとめた府立大学人間環境学部環境デザイン学科4回生の辻晶子さんが「近世末期下鴨神社における社家町を含む周辺地域の構成」と題する講演を行い、その後パネルディスカッションを行った。参加者：約100名。内容は翌日の京都新聞にも紹介された。 平成22年3月末に、研究成果報告書「20世紀における京都の文化と景観に関する学際的研究—下鴨・北山地域を中心に」を刊行し、府立大学図書館および京都府内の主な公共図書館・生涯教育機関に配付した。 			
【お問い合わせ先】 文学部 野口研究室			
Tel: 075-703-5239		E-mail: noguchi@kpu.ac.jp	